

平成28年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実 施 報 告 書

HT28036

獣医の卵たちと一緒に、野生動物保護とその病気の関係について考えよう！



開催日：2016年8月3日-4日

実施機関：酪農学園大学

(実施場所) (酪農学園大学)

実施代表者：浅川 満彦

(所属・職名) (酪農学園大学・獣医学群・教授)

受講生：小学校5、6年生 27名

関連URL:

【実施内容】

1. [受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点]

(1) 本事業は、実施協力者である獣医学群の学生を講師とし、いま自らが学んで身に着けつつある技術や知識を実施代表者のフォローを受けながら、参加者である小学生にわかりやすく伝えていく点に特色がある。学生がいま現在、苦しみながら身に付け、あるいは感じている「野生動物を対象にした獣医師の役割」「何が本当の野生動物保護なのか」「研究を行う意味」について2日間をかけて講義した。普段は、講義を受ける側の大学生を講師とし、グループごとに講師が子供たちと一緒に考えながら徐々に掘り下げることで、子供たちにも深く理解してもらえそうなプログラム作りを心掛けた。

(2) 野生動物獣医師の体験として野生動物の捕獲器具の設置と放逐体験を行った。本年度は、残念ながら野生動物が設置した捕獲器具にかからず、放逐体験はできなかったが、捕獲器具の設置と学生の説明を通して、野生動物が我々の生活圏に非常に近いところで生活している身近な存在であり、野生動物の病気が我々ヒトや家畜にも影響をおよぼす可能性があることを子供たちに感じてもらえたと考えている。そして、野生動物獣医師は怪我をした個体の治療もちろん大切ではあるが、病気(異常)の解明を行うことがとても大切であり、それを可能とするためには“研究活動が大変重要である”という道筋を立てて、子供たちにも容易に理解できるように研究活動の意義を説明した。

(3) むいぐるみクマの捕獲・保護として吹き矢体験や、メスや針を使用し、食用の鶏肉を切開・縫合する等の野生動物の救護模擬体験を行った。これにより、一般的な野生動物獣医師の役割である、個体の治療の現場や実態、その難しさを体験してもらった。

(4) 寄生虫の説明については、代表者だけでなく、学生にも発表時間を与え、現在学ぶ段階にある学生の視点から、より子供たちの理解を得やすいような講義方法を目指した。また、実際に多くの寄生虫の標本を用い、また各班に1つずつ顕微鏡を用意し観察させ、日頃、子供たちには馴染みの薄い寄生虫について観察してもらった。

(5) イラストを多用したテキストを作成し、5-6年生の子供達が興味・関心をもてるように工夫をした。本事業のテーマのひとつでもあった「ワンヘルス」への理解については、紙芝居を用いて、子供の興味を引くとともに、イメージがつかみやすいように心がけた。

2. [当日スケジュール]

8月3日【1日目】			
12:30 ~ 12:50	集合・受付		研修館
13:00 ~ 13:10	開講式		
13:10 ~ 13:45	体験①	野生動物捕獲器具の設置実習	演習林 ※ 雨のため、予定を変更し先行実施
14:00 ~ 15:00	お話①	科研費の説明と「野生動物の病気と保護活動」	B4号館
15:10 ~ 16:30	体験②	獣医さんのツールを使ってみよう	B4号館
16:30 ~ 17:00	体験②	吹き矢体験	B4号館
17:00	解散		研修館

8月4日【2日目】			
8:30 ~ 8:50	集合・受付		研修館
9:00 ~ 10:30	体験③	「身近な野生動物にアプローチしよう」	野生動物医学センター 演習林
	体験④	「痕跡標本観察」	
	体験⑤	「野生動物の捕獲方法」	
10:30 ~ 12:00	体験⑥	「身近な寄生虫」 「寄生虫と寄生虫疾病変の観察」	B4号館
12:30 ~ 13:30	昼食		大学生協
13:30 ~ 14:00	修了式		研修館
14:00	解散		

3. [実施の様子]

本事業は、募集の段階から札幌市のほか、北海道外からも問い合わせを受け、定員の2倍を上回る50名以上の参加希望があった。少しでも多くの子供達を受け入れるべく調整を行ったが、受入体制や予算の制約上、申込者の半数しか受け入れることが出来なかった。今年度は最終学年である6年生の受入を優先したため、今回参加できなかった多くの子供達は来年度以降受け入れたいと考えている。参加した子供達は、野外調査・観察等では好奇心いっぱいの表情を浮かべ楽しそうにしていた。他方で、研究紹介の講義の際には、野生動物の保護活動について1人1人が真剣に考え、生じた疑問をその都度、実施協力者の学生にぶつけている様子が印象的であった。

今回のプログラムを通じて、科研研究の内容への理解という当初の目的だけでなく、「調査研究のおもしろさや難しさ」も多少なりとも感じてもらえたと考えている。

【 ① 野生動物捕獲ワナ設置実習 】



【 ② 科研費や研究内容の説明 】



【③ 獣医さんのツールを】



【④ 野生動物の捕獲方法】



【⑤ 痕跡標本観察】



【⑥ 寄生虫標本の観察】



【集合写真 参加者27名】



4. 事務局との協力体制

- 本事業は、大学・学務部研究支援課が参加者の募集から当日の運営、経理管理およびイベント実施に係る関係部署へ連絡・調整、広報活動を担当した。

5. 広報活動

- 隣接する札幌市全域の小学生がいる家庭に配布される子供情報誌「エコチル」に募集案内記事を掲載した。
- 大学の所在地である地元江別市の小中学校に、事業の案内チラシを配付した。
- 本学園広報室と連携し、大学HPに募集案内を掲載した。

6. 安全配慮

- 事故防止のため、イベント時は、研究補助等専門的作業に慣れている研究室の学生を実施協力者とし、実施前から入念な打ち合わせとテストを行い、安全配慮に努めた。
- おおよそ受講者5名に対し、実施協力者の学生が1名つく班編成を行った。
- 受講者および実施協力者である学生は、損保ジャパン レクリエーション補償プラン（傷害保険）に加入した。
- 屋内・屋外にかかわらず、常に水分補給を行えるよう準備し、また、常に注意喚起を行うことで、熱中症防止対策を行った。
- 当日は、1日目の午後が大雨の予報であったため、タイムスケジュール上、野外活動を先に実施し、雨の中の移動・実施となることのないよう配慮した。

7. 今後の課題

本事業は、募集段階から札幌市のほか、北海道外の関西からも問い合わせを受け、定員を超える参加希望があった。日本学術振興会のHPでの事業案内のほか、昨年までの参加者から口コミでイベント情報が広まっているようである。参加者およびその保護者から一定程度の評価をいただいている結果であると思うので、今後も可能な限り継続して本事業を実施していきたい。

今年度は、地元江別市からほとんど参加者を受け入れることができなかった。今後、地元への事業案内・広報活動について方法も含めて再検討を行いたいと考えている。

【実施分担者】

なし

【実施協力者】 9 名

【事務担当者】

玉田 哲也 大学・学務部研究支援課・主任主事

長谷川 泰子 大学・学務部研究支援課・主任主事